

# 川本嘉子 (ヴィオラ) & 小山実稚恵 (ピアノ) デュオリサイタル

1 部

ヴィオラ・ダ・ガンバ ソナタ 第2番 BWV1028  
..... J.S.バッハ

2 部

スケルツォ ..... ブラームス

チェロ ソナタ 第3番 Op.69 (ヴィオラ版)  
..... ベートーヴェン

ヴィオラ ソナタ 第1番 Op.120-1 ..... ブラームス

冬

2018  
四季コンサート  
35周年記念

2018年12月3日(月) 18:00開場 18:45開演  
会場:アクトシティ浜松中ホール  
主催:浜松音楽友の会

## プロフィール

### 川本嘉子 (ヴィオラ)

1992年ジュネーヴ国際コンクール・ヴィオラ部門で最高位(1位なしの2位)。1996年村松賞受賞。1997年第7回新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、2015年東燃ゼネラル音楽賞・奨励賞受賞。現在、ソリスト・室内楽奏者、オーケストラ奏者として最も活躍しているヴィオラ奏者の1人。京都アルティ弦楽四重奏団、AOIレジデンス・カルテットのメンバー。3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンを始める。桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋女子高等学校音楽科を経て、同大学に入学。これまでに、ヴァイオリンを江藤俊哉、鈴木愛子、室内楽を末吉保雄、原田幸一郎の各氏に師事。在学中より演奏活動を開始。1989年、イグレック・カルテットで第6回東京国際コンクール室内楽部門優勝。1989年、1990年にはタンクルウッド音楽祭に招待を受けて参加。Grace B.Jackson賞を受賞。1991年東京都交響楽団への入団をきっかけにヴィオラに転向。1999年より2002年退団まで首席奏者を務める。また2017年からNHK交響楽団の首席客演奏者を務めている。アメリカのマールボロ音楽祭、スイスのダボス音楽祭、東京・春・音楽祭、などに参加。サイトウキネンオーケストラ、小澤音楽塾、水戸室内管弦楽団、アルゲリッチ音楽祭等にも定期的に参加し、アルゲリッチやユリー・バシュメットなど世界一流のソリスト達と共演し絶賛を博している。ソリストとしてもガリー・ベルティニ、ジャン・フルネ、ペーター・マークなどの著名な指揮者と共演している。CD録音はチェンバロの中野振一郎との「ヴィオラ・バロック・ミュージック」(マイスター・ミュージック MM-1028)「J.S.バッハ: ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロのためのソナタ」(マイスター・ミュージック MM-1075) がリリースされている。

### 小山実稚恵 (ピアノ)

人気・実力ともに日本を代表するピアニスト。チャイコフスキー国際コンクール、ショパン国際ピアノコンクールの二大コンクールに入賞以来、今日に至るまで、コンチェルト、リサイタル、室内楽と、常に第一線で活躍し続けている。2006年~17年までの壮大なシリーズ『12年間・24回リサイタルシリーズ』は、その演奏と企画性に於いて高い評価を受けた。2019年春からは、新シリーズ『ベートーヴェン、そして・・・』がスタートする。これまでに国内の主要オーケストラはもとより、チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ、ベルリン響、ロイヤル・フィル、BBC響、シンフォニア・ヴァルソヴィア、ワルシャワ・フィル、モントリオール響などと共演しており、国際的指揮者との共演も数多い。協奏曲のレパートリーは60曲を超える。東日本大震災以降、被災地の学校や公共施設等で演奏を行い、仙台では被災地活動の一環として自ら企画立案し、ゼネラル・プロデューサーを務めるプロジェクト『子どもの夢ひろば "ボレロ"』を毎年開催している。CDは、ソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結ぶ。30枚目となる最新盤は、『バッハ: ゴルトベルク変奏曲』で、『レコード芸術』の特選盤に選ばれた。また、著書『点と魂と - スイートスポットを探して』が、KADOKAWAより出版されている。これまで、2005年度 文化庁芸術祭音楽部門大賞、2013年度 東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門本賞ならびにレコード・アカデミー賞(器楽曲部門「シャコンヌ」)、2015年NHK交響楽団「有馬賞」、2015年度 文化庁芸術祭音楽部門優秀賞ならびに第28回ミュージック・ペンクラブ音楽賞、2016年度 芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2018年度 大阪府市民表彰を受ける。2017年度には、紫綬褒章を受章している。

川本 嘉子(ヴィオラ)

小山 実稚恵(ピアノ)

デュオリサイタル



YOSHIKO KAWAMOTO  
&  
MICHIE KOYAMA  
DUO RECITAL

## ●J.S.バッハ／ヴィオラ・ダ・ガンバ ソナタ 第2番 BWV1028

バッハによるヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロのための3曲のソナタのうちの1曲で、バッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた時代に作曲された。現在では、チェロとピアノ、コントラバスとピアノなど、様々な組み合わせで演奏される。曲全体は、第1楽章アダージョ、第2楽章アレグロ、第3楽章アンダンテ、第4楽章アレグロの4楽章から成っており、教会ソナタの形式を踏襲して緩-急-緩-急を繰り返すよう構成されている。鍵盤楽器の右手と弦楽器の2声部が対位的に絡み合い、鍵盤楽器の左手が奏する通奏低音と合わさってトリオ的なソナタを形成する。第1楽章では、前半では弦楽器と鍵盤楽器の右手によってテーマが提示され、後半でそのテーマが調性と声部を変えて現れる。属和音による終止によって第2楽章が導かれる。第2楽章は、反復を繰り返す明るい舞曲風音楽。シンコペーションの主題とそれに呼応する通奏低音のリズムが特徴的である。第3楽章は、弦楽器が歌う抒情的な主旋律が切れめなく続いていく様が印象的な音楽。第4楽章では、弦楽器の高い技巧が採り入れられ、それを鍵盤楽器の分厚い和音が支える。

## ●ベートーヴェン／チェロ ソナタ 第3番 Op.69 (ヴィオラ版)

ベートーヴェンの活動中期、交響曲第5番《運命》の創作の真っ只中であり、まさに次なる交響曲第6番《田園》に着手しようかという時期に生まれた作品。曲全体は、第1楽章アレグロ・マ・ノン・タント、第2楽章スケルツォ・アレグロ・モルト、第3楽章アダージョ・カンタービレ〜アレグロ・ヴィヴァーチェの3楽章から成る。形式的には、緩徐楽章をあえて欠き、緩徐導入部を終楽章においている点が特徴的である。第1楽章は、弦楽器のソロによるのびのびとした主題の提示で始まり、広い音域を自由に行き来しながら音楽が進行する。第2楽章は、ロンドの構成を思わせる。ピアノの独奏で始めると、主題は弦楽器へと引き継がれ、やがてピアノによる強調的な音が強い印象で現れる。スケルツォならではの躍動感に満ちた楽章。第3楽章は長大であり、ロンド形式によるフィナーレではなく、あえてソナタ形式が採用され、対位法を用いた重厚な音楽で全体が締めくくられるよう構成されている。再現部における華やかで壮大なダイナミクスを経て終わりへと向かう。

## ●ブラームス／スケルツォ

この作品は、1853年にブラームスがシューマンらとともに作曲したハ短調のヴァイオリンソナタの第3楽章にあたるものであり、作品番号は存在しない。この楽章はブラームスによって担当された。この作品が《F.A.E.ソナタ》と呼ばれるのは、元のヴァイオリンソナタを創作するきっかけとなったヴァイオリニスト、ヨアヒムのお嬢であった「自由に、しかし孤独に」(Frei aber einsam)の頭文字を並べたものに由来しており、これらの文字を音名に読みかえてF-A-Eの音を動機に用いた音楽になっているためと言われている。曲全体は、アレグロで3部形式をとる。冒頭で「運命」の動機に導かれた主題が奏されると、それは情熱さを帯びながら展開する。トリオの中間部で弦楽器とピアノが旋律を引き継ぎながら進行し、最後にハ長調の短い結尾が現れる。F-A-Eの音型は主に和音進行において用いられている。

## ●ブラームス／ヴィオラ ソナタ 第1番 Op.120-1

1894年に作曲されたクラリネットソナタを作曲者本人が編曲した作品。第1番と第2番の2曲があるが、いずれもブラームスの最晩年にあたる時期に作曲された作品にもかかわらず、当時よくみられた重厚さよりも、簡潔で均整のとれた洗練さに満ちている。全体は、第1楽章アレグロ・アップパシオナート、第2楽章アンダンテ・ウン・ポコ・アダージョ、第3楽章アレグレット・グラツィオーソ、第4楽章ヴィヴァーチェの4楽章から成っている。第1楽章は、冒頭から力強く始まり、第一主題が提示されるが、そこで示される音型が曲中に何度も現れて曲全体の統一をはかっている。第2楽章は緩徐楽章であり、豊かに歌う弦楽器に対して、特徴的な低音をもったピアノが寄り添う。第3楽章は、スケルツォに相当する部分。澄み通るような旋律が穏やかながら軽快な音楽を生んでいるが、途中で現れるシンコペーションのリズムが訴えかけるような側面もみせる。第4楽章は、晩年のブラームスらしく、締めと慰めとを含むような優しさをたたえている。曲のいたるところで複数の音が水平的に進行する部分がみられ、それが変形しながら全体に展開される。最後は情熱的に終わりを告げる。